



第50回 フローレンス・ナイチンゲール記章受章者紹介

2025年5月12日

フローレンス・ナイチンゲール記章は、世界中の看護師などの中から顕著な功績を残された方に贈られる章です。50回目となる今回は、世界17カ国、35人が受章し、日本からも春山典子さん、紙屋克子さん、河野順子さんの3人が選出されました。

春山さんは、1985年に群馬県で発生し520人が犠牲になった航空機墜落事故において、看護の責任者として延べ1000人以上の看護師・保健師の先頭に立ち、1カ月半にも及ぶ活動を指揮・統率しました。

紙屋さんは、意識障害で意志表示できない患者の身体機能の改善・回復を目的に、患者の身体・認知面に応じて支援する看護方法を確立した看護実践の第一人者であり、五感で患者の反応をとらえ、その人として生き直す瞬間の実現を目指す看護を広めています。

河野さんは、患者が退院した後も住み慣れた地域で必要な医療を受けられ、最期まで尊厳を持って生活できるように、現在の地域包括ケアにつながる「退院計画」のための、多職種連携、在宅医療推進に向けた地域の受け入れ体制の構築に取り組みました。

2024年度 日本赤十字看護学会 研究奨励賞受賞者コメント

「壮年期のがん患者を支援する外来看護師が診療科を越えて語り合う取り組みの進展」

中村滋子（日本赤十字看護大学さいたま看護学部）

このたび、日本赤十字看護学会より奨励賞を受賞いたしました。心より感謝申し上げます。本研究では、地域医療支援病院に通院する壮年期のがん患者への支援体制に着目し、アクションリサーチを用いて外来看護師の皆様とともに、臨床現場の課題と実践的支援の在り方を検討してまいりました。看護師同士が診療科を越えて語り合う取り組みは、役割の再認識と自信をもたらすだけでなく、患者を支える手がかかりとなり、外来看護の強みとして重要な示唆を得ました。今後も、本研究で得られた知見を基盤とし、壮年期患者への支援の在り方を継続的に探究してまいります。最後になりますが、現場の課題に向き合い共に取り組んでくださった外来看護師の皆様、そして研究の継続を支え温かなご助言をくださった皆様に、心より感謝申し上げます。



右：受賞者の中村滋子先生

「若年成人期にがんと診断された男性が生きぬいていく経験」

遠山義人（日本赤十字看護大学看護学部）



受賞者の遠山義人先生

このたび、「若年成人期にがんと診断された男性が生きぬいていく経験」に関する論文に対し、学会奨励賞という身に余る賞を賜り、心より感謝申し上げます。本研究は、若年成人期にがんと診断された男性が、「がん患者としての自己」に抗いながら、医療者には表出されにくい苦悩を抱えつつも、自分らしく生きようと模索する経験を、当事者の語りから描いたものです。本論文が多くの方の目に留まり、若年男性がんサバイバーへの理解を深め、看護実践や支援の充実につながることを願っております。

ご経験を語ってくださったインタビュー参加者の皆さま、温かな励ましと的確なご助言を賜りました編集委員・査読委員の先生方、そして終始ご指導くださいました恩師に、心より御礼申し上げます。今後も当事者の声に学びながら、臨床と研究の双方に真摯に向き合い、歩みを重ねてまいります。

日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター開催 2025年度フロンティアセミナー

「ベテラン・ナースに聞いてみよう～看護を続ける中で培ったマインド～」レポート

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンターは、「一人ひとりを大切にし、人と人がつながる社会へ向けて、看護から風を巻き起こそう」というスローガンの下で活動を展開しています。本センター事業のフロンティアセミナーは、大学の研究・教育機能を活用し、臨床実践能力向上に資する機会を提供するものです。

2月21日（土）にオンラインで開催した本セミナーに先駆け、専門資格や管理の職位をもたずとも仕事を続ける二人のベテラン・ナースにインタビューしました。セミナーでは語りから見てきたマインドと看護教育学専門家からの見解を共有し、参加者と討議しました。そのマインドには、目の前の人の安楽を大切にする、わからないことはわかりたい、よりよくなるためにオープンである、看護する姿と自身の生活が自然に融合している、看護が楽しいという要素があり、看護教育学の見地からも成人学習の深化に特徴的なものとして理解されました。後進にはベテラン・ナースの姿から多くの学びがありました。



オンラインセミナーにご登壇の先生と運営スタッフ

- 発行 日本赤十字看護学会 広報委員会
東京都渋谷区広尾4-1-3 日本赤十字看護大学内
- 学会ニュースレターに関する皆様のご意見・ご感想は下記まで
j_rcsns@redcross.ac.jp

映画「長崎－閃光の影で－」一考

2025年夏に公開された映画「長崎－閃光の影で－」は、1980年に日本赤十字社長崎県支部がまとめた、被爆者救護にあたった赤十字看護婦の証言集を原案とし、原爆投下直後の長崎で救護活動を行った3人の看護学生の姿を描いている。

作中には、赤十字看護婦の言動が人種差別的と受け取られかねない描写が含まれていたことから、日本赤十字社は「いかなる差別も認めない」という立場から、該当シーンが史実に基づくものではないとする釈明をエンドロールに掲載するよう依頼した経緯がある。

現在も政治的緊張の高まりにより核兵器リスクが指摘される中、広島・長崎の原爆投下から80年となる2025年8月には、日本赤十字社と赤十字国際委員会が、世界各国の政府に対し核兵器の惨禍を防ぐ行動を求める共同声明を発表。

本作は、広島、長崎での被爆の実態の様相を目撃し、そこでの救援活動にあたり被爆の現実を知る日本赤十字社として、今後も核兵器の廃絶を訴え続けていかなければならないという思いを新たに作る作品である。

編集後記

日本赤十字看護学会ニュースレター24号をお送りします。

今回は、第50回フローレンス・ナイチンゲール記章受賞者3人の紹介、2024年度研究奨励賞受賞者2人の演題と各人の抱負を載せました。さらに日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンター活動報告とともに、2025年夏に公開された映画「長崎－閃光の影で－」を収録しました。「広島、長崎での被爆の実態の様相を目撃し、そこでの救援活動にあたり被爆の現実を知る日本赤十字社として、今後も核兵器の廃絶を訴え続けていかなければならないという思い」に強く共感いたします。

2025年6月にヘルシンキで開催されたICN大会のテーマは「Nursing Power to Change the World」でした。今も戦火に苦しむ人々を思い、看護の力で世界を変え、平和をもたらすことができると信じたいものです。

広報委員会委員長 井部俊子